第２部　全学ＦＤ研究集会「大学改革における大学アーカイヴズ」の記録

１．講演記録

パート１「大学改革における大学アーカイブズの役割
－「大学」の基礎条件の一つとして－」

講　師：立教学院　本部調査役
東京大学　名誉教授　　寺崎　昌男　氏

パート２「学習院アーカイブズの活動と課題
―私大アーカイブズの一事例―」

講　師：学習院アーカイブズ　　桑尾 光太郎 氏

２．講演レジュメ

１．講演記録

日時　平成 23 年 12 月 17 日　15 時 30 分～17 時 30 分

場所　近畿大学東大阪キャンパス本館 7 階ホール

参加者　約 300 名

パート１「大学改革における大学アーカイブズの役割
　　－「大学」の基礎条件の一つとして－」
　　講　師：立教学院　本部調査役
　　東京大学　名誉教授　寺崎　昌男　氏

パート２「学習院アーカイブズの活動と課題
　　―私大アーカイブズの一事例―」
　　講　師：学習院アーカイブズ　桑尾 光太郎 氏
　　総合司会　教育改革推進センター長　　浦崎　直浩
　　司会　　研究代表者・経営学部教授　　増田　大三

浦崎　それではただ今より、平成 23 年度第 2 回全学 FD 研究集会を始めさせていただきます。私は教育改革推進センター、センター長で、全学の FD 研究集会の企画運営を担当しております浦崎と申します。本日は総合司会を務めさせていただきます。どうぞよろしくお願い申し上げます。

本日は多くの先生方にご参加いただき、御礼申し上げます。教育改革推進センターでは、全学 FD 研修会を年 2 回、1 回は学内の先生方の研究成果の報告、もう 1 回は外部から著名な先生方をお招きして、FD に関するご講演をいただいております。既に 7 月に、運営学部の岡本先生の教育の取り組みの事例として、芸術教育とワークショップの FD 研修会を開催いたしました。今回は大学アーカイブズについて、お二人の先生をお招きして、講演を拝聴することにしております。

まず始めに、本学全学共通教育機構副センター長、経営学部教授の増田大三先生より、今回のご講演の趣旨を含めまして、ご挨拶を頂戴したいと思います。どうぞよろしくお願い申し上げます。

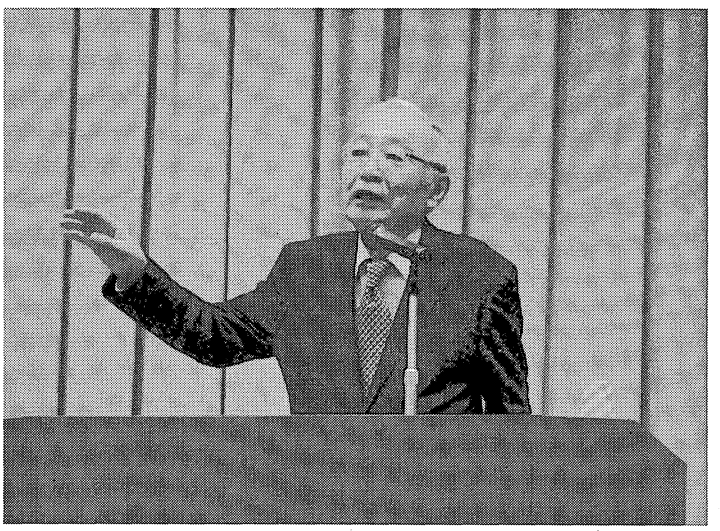
増田　皆さん、こんにちは。全学共通教育機構の副機構長をしております増田でございます。よろしくお願いいたします。先ほどの学内における集会に続きまして、先生方、職員の方々はたいへんお疲れだと思いますけれども、今後の大学改革について非常に重要なテーマでありますアーカイブズについて、今日はお二人の先生においでいただきまして、ご講演をいただき、いろいろな示唆を賜ればということで、FD 研究集会を開催させていただくことといたします。先ほど休憩時間に見られた先生も多かろうと思いますけれども、わが校の原子力研究所が建設されますときのテープ、熊野高専が名張に移転する際に資料の整理をして、出てきたものです。それを新たに DVD に焼き直して、今日先生方に見ていただきました。非常にわが校にとっても貴重な資料でございますし、また社会にとっても、今原子力が問題になっておりますけれども、最初に民間の施設として原子力研究所を建設したということで、非常に意義のある資料ではないかと思って見ていただきました。ただ、これは一つの例でございまして、創設以来 86 年、様々な資料や書類が近畿大学に蓄積されていると思うのですが、残念ながらそれらが完全な形で整理され保管されているという状況ではないように思います。13 年後には開学 100 周年を迎えることになりますし、そのときには 100 年史という年史をつくることになるでしょう。そのためにも今この時点から、近畿大学の歴史を振り返り、様々な事務においてつくられた文書とか資料を、きちっとした形で整理しておく必要を切実に感じておりまして、今日の FD 研修会をお願いいたしました。たまたま今日は、先に職員の方が参加される、評価検証の集会がございました。今日は FD とさせていただいたのですが、本来であれば FD、SD 研修集会にすべきであったなと、今朝電車に乗ってから思った次第です。少し知恵が足りなかったかなということをお詫びさせていただきたいと思います。そして本年、近畿大学の大学アーカイブズの構築に関する基礎的研究ということで、学内研究助成金を受け、学内及び短期大学の先生 8 名で研究を進めさせていただいて、様々な大学を訪問させていただいております。その中で、我々の共通認識として、やはり大学全体、教職員全体でこのアーカイブズについての基本認識を持ち、またこの変革時期にあります大学教育において、アーカイブズが果たす役割、またわが校では自校学習と申しておりますけれども、自校教育においてもまたこのアーカイブズが大きな役割を果たすのではないかと考えておりまして、そこで今日、ご高名な二人の先生においでいただいて、ご講演をいただき、様々な示唆をいただこうということで、開催させていただきます。

それでは引き続き、司会をするということでございますので、まず今日は二つのパートに分けさせていただきました。まずはアーカイブズの基本認識。それから、変革期における大学にとってのアーカイブズの役割ということです。まずは寺﨑昌男先生にご講演をいただこうと思います。寺﨑先生は 1932 年の生まれということで、来年は 80 歳をお迎えになりますけれども、東京大学大学院教育学研究科を修了し、教育博士号を取得されました。その後の主な経歴はプロフィールを見ていただくことにしまして、現在は東京大学、桜美林大学の名誉教授、それから立教学院本部調査役、財団法人中央教育研究所理事長、立教大学大学教育研究・支援センター顧問等を兼任されております。ご専門は日本近代大学史、教育史でして、最近の代表的な著書はプロフィールを参照いただきたいと思います。また教育史学会代表理事、日本教育学会会長等も担われ、日本学術会議会員でもあります。たぶん日本の教育史、大学教育については第一人者の先生であろうと思っております。今から先生に約 1 時間ご講演をいただきますので、よろしくご拝聴いただければと思います。それでは先生、よろしくお願いいたします。

パート１　「大学改革における大学アーカイブズの役割
－「大学」の基礎条件の一つとして－」

はじめに

こんにちは。ご紹介いただきました寺﨑であります。今日こういう場にお呼びいただいたことにまずお礼を申し上げたいと思います。一つは呼んでいただいたことへのお礼、そして第二はこれだけたくさんの方に、いかにも地味なテーマの話を聞いていただけるということ、そのことだけで私はすごくありがたいと思っております。



寺﨑昌男氏

今から 32、33 年くらい前まで、アーカイブズなどというものについては誰も考えていませんで

した。否、知りませんでした。私どもも知りませんでした。それが30数年経つと、今や大学改革の中心的な課題の一つとなり、一番重要なことで、過去の文献をどうするかという課題が大きな関心を持たれるようになりました。この時代そのものが、私にとっては非常に感謝すべきことだと思われます。

今、司会の増田先生から、来年は80歳になるといきなり年齢を明かされたのですが、それは本当です。自分でも年齢を忘れてつい何かしそうになりますので、自戒せねばならないと思います。毎日忘れないように、お前は年を取っているんだからと言っているのですが、80歳近くになってこういう話を聞いていただけるというのは、私にとってはもう一つのありがたいことです。

まず始めに、大学のアーカイブズということをいつ私たちが知ったかについて述べましょう。

私は1975年から約12年間、80年代の後半まで、東京大学百年史というものに関わりました。先ほどこちらの大学ではあと13年で100年になると伺いましたが、ちょうど同じくらいの時間が東大百年史の編纂にかかったんですね。3人の委員長のうち第3代目が私で、私の時代に全部刊行をやり遂げたのですが、その当時、私たちは、アーカイブズというものの、言葉すら怪しいほどでした。

もっとも、今は東京大学大学史史料室という形でアーカイブズができております。それは私どもがつくったものです。また最近では、東京の大東文化大学が歴史資料館をつくりまして、それにも私は参画いたしました。そこは一般に開いております。もう一つはご存じの大学基準協会。ここには大量の資料があります。戦後、占領軍が日本の大学を変えさせようといろんな努力をしました、その窓口が大学基準協会だったわけです。その当時は財団法人ではなく、単なる民間団体でした。そこを窓口にして、占領軍がいろいろな指導をし、4年間の学部の教育、それから大学院、そして図書館、これも戦前は未熟なものを立派にし、もう一つは、大学の通信教育です。これも戦後日本で初めて本格的に始まったものです。大学院教育、学部の教育、図書館、通信教育という四つの基本制度は占領軍がいないとできないものでした。それらについて四つの基準をつくった窓口が、大学基準協会なのです。後に協会は財団法人となり、今は認証評価機関として認められています。その協会に保存されている資料は、ものすごく大切なものなんです。手で触るとボロボロ崩れそうなザラ紙の資料の中に、占領軍が何と言ったか、それに対して日本がどう答えたか、そのカギとなる記録が山のようにあるのです。今それをアーカイブズにすべきだという提

案をいたしまして、現在整理がきちんと進行しております。いずれ公開されるでしょう。そういう事業にも私は参画しております。

そういう事蹟をもとにして、今日は肩に力を入れないでお話ししたいと思います。気楽にお聞きいただきたいと思います。

１．　大学に対するニーズの強化・多面化と求められる自己革新

まず一番に、今大学はどのようなことに迫られているのか、これを申し上げておかないといけないと思います。

第一に、「質」というものについて皆が関心を持ち始めたということです。これは教員の先生方よりも職員の方のほうがひょっとしたらもっと深刻にご存じかもしれません。

これまで大学はどこに関心を持たれていたかというと、まず入学のところでした。何点あれば進学できるか、どれくらいの成績なら推薦を受けられるかという、入るところがまず問題でした。その次に出るところです。果たして卒業できるのか、卒業したとしてその前提に企業や官庁に就職できるのか。その二つだけが問題となっていて、それがずっと戦後 60 年間続いてきたわけです。大学についてはその二つしか問題にならなかった。ところが、十数年前から、入って卒業するまでの「間」に大学が何をしたかということが今問われているわけですね。そこのところを表す言葉が大学の「質」なのです。入った学生にどれだけの力をつけたか。この質の側面が、かつて全然考えられなかったほどの関心の対象になっているのです。

それはいくつもの原因から起こっていることです。

第一は、大学にとってみれば、非常に手近な問題として、学生の確保です。「質」がよくなければ、志願者の確保が難しい。18 歳人口は減るばかりで、その限られた人に、どれだけ自分の大学に目を向けさせるか、実際に受験させるかということが、大学にとっての緊急の課題であります。

第二は、今申し上げたプロセスのところで何をしているのか、昔とは比較にならないくらい、外側の社会が問題視しています。手近なところでは保護者で、それから産業界、これは昔からのことですが、最近ではますます、国際的な競争という観点から問題視しています。また官庁も、優秀な若手を採りたいので、そのために大学は何をしているのかという目で見始めています。つまり国内の関係者が大学を見る目は、かつてとは比較にならないくらい厳しくなってきたという問題がございます。

しかし、それだけではありません。第三には、国際的な動きがあります。今文科省や中教審等が大学教育の充実を言い始めたのか、その背景の一つが、ヨーロッパの EU 諸国の動きです。最近はギリシャのように非常に困難を抱えている国もありますが、EU 諸国全体の水準を高めようとする動きです。そのためには、教員や学生がどの大学にいても学べるよう、流動性を高めようと焦っています。EU 全体の大学の質の力を上げたい。なぜかというと、世界中の留学生がアメリカに取られるからです。どうやら最近は、シンガポールその他東洋諸国にも取られているらしい。これではだめだという危機感がヨーロッパ、特に EU 諸国には強いわけですね。それを守るためにどうしたらいいかというと、学生や学者をヨーロッパに引き留める必要がある。それによって、世界の留学生をヨーロッパに集める必要がある。そのためには水準をきちっと守らなければいけないと考えているのです。もっとも、ドーバー海峡を越えてイギリスだけは、ずっと前にサッチャー首相の下で厳しい質の維持を始めました。それに続くかたちで、カリキュラムの共通化、国際的水準の設定を行い、それを守ることが目指されています。こういうヨーロッパ諸国の動きが日本にも多大な影響を与えているわけですね。放っておいたらヨーロッパからもアメリカからも大きく引き離される。この危機感が、政府にも産業界にも強くあるわけです。ですから世界中で東大はランキング何位かというようなことが問題になるのです。京都大学は何番か、九州大学はどうかということになってくるわけですね。そういう国際的な背景が、実はものすごく厳しく存在しています。これが質保証というものが特に求められている、第四の大きな理由です。

会場風景

五番目は、少子化の問題です。これはご承知かと思いますけれども、18 歳人口は、あと 8 年か 9 年くらいは今の状態が続きます。しかしその後は、回復し難い超少子化の時代が参ります。大学に誰が来てくれるかということはものすごく大きな問題になります。それに

対応するために何が必要かというと、今何をしておくか、これが大事です。８年後に慌てていたのではどうしようもありません。そのためにはどうしても、質の保証をするということについて、今、できる限りの手を打っておかなければならない。

そういった意味で日本は、大学の教育をよくしていかなければならないということに迫れられているわけです。

もちろん、今申したのは全部外側からの圧力です。大学が責任を持てない部分からの圧力です。しかし大学としてはどういうことが課題になるかというと、目の前の学生諸君の学習にどう応えるかということです。この責任は、いよいよ免れ難くなってきたと思います。そして、アーカイブズを設置するかどうかということも、それに対応する方策の一環としても存在しているということが、私の申し上げたいことでございます。

皆様に強調しておきたいのですが、大学基準協会では、今年度からの認証評価に際して、アーカイブズをきちんとつくること、そして本格的な沿革史をつくることは、「内部質保証システム」の一つだ、と言っているのです。内部質保証システムの一環として、それらが今求められているんですね。それを承知しておいていただきたいと思います。

最後に申し上げたいのは、「質保証」の要求はブーメランのように各大学自身に返ってくるということです。

あらゆる団体が大学についての意見を述べるときに、このことを言うのです。特に、日本学術会議が文科省から諮問を受けて、質保証に関する会議を数年前から開いていました。学術会議ですからあらゆる専門領域の人がいます。そういう人たちが自分の領域で質を保証するためにどういうことをしたらいいかという議論を重ね、その結論が昨年から今年にかけて全部公になりました。結局その結論とは、各大学の努力を待つほかはないということです。彼らが言うには、大学に小中高校のような学習指導要領をつくるようなことを自分たちは決して望まない。大学学習指導要領をつくれとか、各教科ごとに水準と内容を示すとか、そういうことはしない。結局のところ我々はどの大学にも共通して必要なことを示し、あとは各大学の対応努力を待つのだ、と。私に言わせるとそれは、ブーメランを投げるのと同じで、大学の自律性を前提とする限り、結局のところ自分に返ってきますよ、と日本学術会議は各大学に言っているわけです。結局、好むと好まざるとにかかわらず、大学人としての責務は大きくならざるを得ないと思います。その一環に、アーカイブズの開設も、入ってきているわけです。

２．黎明期の思い出

さて、あまり最初からむきにならずに、ここで私の個人的な経験を申し上げたいと思います。

一つは40年前、東大百年史をつくったときのことです。1970年代後半から80年代にかけてのことですが、東大もこちらと同じように、キャンパスはいっぱいあるし、学部は当時10個、研究所は13か所ありました。それを集めて百年史をつくるのですから、大変なことです。手元の資料としては、明治時代のものがわずかに集まっていただけで、あとは学内に散り散りばらばらでした。その頃、どうやら外国の大学にはアーカイブズというものがあるらしいということを我々はうすうす知りました。しかし東大にはない。どんなに立派な安田講堂があったって、アーカイブズなどのことは誰も考えなかったのです。図書館は何百万冊という本を抱えているけれども、図書館の人は、アーカイブズはうちの仕事ではない、自分たちは図書や文献の整理と分類が仕事だと。アーカイブズは考えていませんでした。

そこで、我々は、世界のアーカイブズを調べてみようと考えました。2代目の土田直鎮委員長の時に、「東京大学における記念的資料と物品の保管と活用に関する研究」と称して、こちらと同じように本部から資金を取って、学内の研究で始めたわけです。そして世界各国の主な大学で「アーカイブズがある」と書いてある所を、分厚い世界の大学一覧をチェックして、全部に質問状を送ったのです。「お宅の大学のアーカイブズはいつできたのか、何のためにできたのか、どんな活動をしているのか」をアンケートにして発送しました。

すると、しばらくしたら続々と返事が来るんですね。それも、アンケート回答どころの返事ではなくて、色々な大学から厚いパッケージがどんどん送られてくる。見ると、いろんな国の大学がアーカイブズに関わっている。我々がよく知っているハーバードなどからは、とても厚い資料が送られてきました。びっくりしたのは、「東大から照会があったから急遽送る」という内容ではなかったことです。どれを見ても、極めて日常的な書簡が入っていて、我々の所ではこんなことをしています、という内容でした。つまりアーカイヴズ活動などは、極めて日常的業務だということを示しているのです。ということは、どこでも普段からそういう事業をずっとやってきたわけですね。アメリカだけで比べてみると、短期大学も含めて92%の大学がアーカイブズを持っているということが分かりました。これは大変なことだと思われました。

また、関連していろんな文献を読んでみますと、近代大学にとって不可欠な施設が三つ

あると書いてあるのです。一つはライブラリー、図書館ですね。それから二番目がアーカイブズ。三つ目がミュージアム、博物館です。頭文字をとってＬＭＡと言われているのです。私たちは知りませんでした。東大だなどと威張ってはいられない、うちは大学になっていないじゃないかということに思い至らされたのです。

傑作でしたよ、アーカイブズという言葉だけを知っていて、実体が思い浮かばないのが当時の私たちの状態だったのです。図書館の地下に昔の書類が置いてあるけど、あれはアーカイブズなんだろうか。もう一つ、事務の人がしょっちゅう出入りする「通信連絡倉庫」というものがありました。裏門の入口の横にプレハブの、かなり大きいけれども粗末な 1 階建ての建物があるんですね。縦が 20 メートルくらいの建物です。時々職員の人が鞄を持って中に入り、しばらく経ってから出てくる。あとから聞くと、「非現用文書」というものがそこに置いてあるらしい。それがアーカイブズかなと。その程度の知識でした。

一方で、先生たちの業績を見ると、アーカイブズのことがいろいろ書いてあるんですね。例えば英文学の先生はイギリスに行って、アーカイブズに行って、ある作家のこういう資料を発見したと。法学部の先生は憲法の調査に行って、ミュンヘン大学の中の資料にはこういう文書があったと。科学史の先生はアメリカの大学でアーカイブズを探って、昔の科学者の伝記を書いておられる。アーカイブズというのを、皆、他の国の大学では使っているんですよ。ところが東大にないことを誰も不思議に思っていない。これは私たちにとって驚愕すべき事実でした。私どもの無知であり、みんなの無知であると。やがて何回も総長に交渉して、やっと在任中に史料室というものをつくってもらったというのが、当時の思い出です。

そのうちに私は、本物を見たいと思うようになりました。80 年代後半に、全米アーキビスト協会というものがあることが分かったのです。それは調査の過程ではじめて分かったんですね。SAA（Society of the American Archivists）というのですが、そこが年 1 回大会を開いているということが分かりました。それに行ってみようと思って、学術会議の国際会議派遣に申請し、幸いなことに通ったんですね。それで行ったわけですが、大会はホテルを全て借り切って行うわけです。日本人は私一人です。カナダやメキシコから来たという人はいたんですけど、95%以上がアメリカ人でした。そして 800 人くらいの参加者の中で、100 人以上がユニバーシティやカレッジのアーキビストのグループでした。その人たちが分科会を持って、そこでいろんな熾烈な議論をするのです。例えば大学のアーカイブズはいったい誰のためのものか、歴史学専攻者のためのものか、それとも市民のためか、あ

るいは集めることだけが問題で活用する必要があるのか、ということです。集めることに協力もせず、活用だけしに来るのはわがまま勝手ではないかと。アーカイヴズ活動をやりだすと、どの国の大学でも当事者はそんなことを思うんだな、と感じながら、参加してきました。

大会が終わった後、2、3 の大学を訪ねてみました。あちこちで話したことがあるのですが、私にとって鮮烈な印象でしたので、お聞きください。ミネソタ大学へ行きましたときに、知り合いになった女性のアーキビストが、私の行ったその日に旅行に行くというのです。どこへ行くのかと聞くと、バケーションを利用してイギリスに行くと。私の代わりにこの人が相手をしてくれるからと、若い女性の大学院生を紹介してくれました。彼女はパートタイムだけど、責任を持ってくれるからと。その女性に私は聞いてみました。ついでだから何でも聞いてやれと思ったんです。「1930 年代のどこかの学部の時間割はないですか」。すると、「ああ、あります」と言うなり目の前でさっとロッカーへ歩み寄ると、そこには 1932 年のものでしたか、生物学部の資料が全部入っていたのです。その中からちゃんと時間割を引き出してくれました。えーっと思いながら見ると、その当時の生物学部の教授活動が一目で分かるんですね。考えてみると、私のおりました東大教育学部では、もはや 10 年前の時間割も残っておりません。その年が過ぎたら、何の役にも立たないものだから、捨ててしまうんです。そういうものがちゃんと出てくるのです。こういうことが実は大事なんだと思い知らされました。これがあると、例えば昭和 6 年から 7 年にかけて、現にどういう人がどういう科目を教えていたかなどが一発で分かるんです。

また、シカゴ大学にも行きました。シカゴ大学は図書館とアーカイブズが一体になって、2 階はアーカイブズ、それより上の階は図書館という構造になっていました。そこで、「すみませんが、こちらの大学で 1929 年にデューイという人が開いた実験学校があるというのですが、その資料はあるでしょうか」と聞いてみました。というのは、シカゴ大学のアーカイブズは理事会と教授会、そして理事会と外部の団体がどういう交信をやっていたかというレベルの記録を一番丁寧に持っていてそれが「売り」でした。それを知っていたからです。デューイという教育哲学者の名前はお聞きになったことがあると思います。20 世紀最大の教育哲学者です。彼がシカゴ大学で付属実験学校を開いたのが 1929 年です。私の質問を聞くと、手伝いの男性が、「ではどうぞ。一緒に行きましょう」と、図書館の地下の、ちょうどこのホールくらいの広大な地下室に連れて行かれました。そこにはずらっと、何百ものアーカイブズのロッカーが並んでいました。彼はある箱の所に行くと、ぱっと引き

出してくれました。デューイがその年に理事会に出した、実験学校をつくりたいという理事会宛届出が瞬時に出てきたのです。本当に驚きました。

そういう四年制大学の、それも名門大学に行って驚いただけではありません。それ以外に、近くにあった短期大学も訪ねてみました。そこにはたった一人のアーキビストが展覧会をやっていました。どういうものかというと、アメリカ中西部のこの地域に対して大学がどういう貢献をしてきたかをテーマにした展覧会でした。彼らは地域に対して、自分たちの大学が何をしているかを知らしめる必要があると、心から思っているのです。そしてそのことをテーマにして展覧会を開いているわけですね。

大学アーカイブズの専門書を読んでみますと、こういうことが書いてありました。アメリカの大学アーカイブズは、ヨーロッパからの二つの伝統を引き継いでいると。一つは「マニュスクリプトの保存」という伝統。マニュスクリプトとは、手稿とか原稿と訳されることもありますが、概ね手書きの原文書のことです。二番目は、それを活用して「歴史研究」をやるという伝統。この二つの伝統を引き継いで、アメリカが次に付け加えたのが、「地域への大学情報の公開」という新しい伝統だというのです。大学は地域のためにあるという伝統を踏まえて、アメリカの大学アーカイブズは発展していったことがよく分かります。私はその三つのうち一番最後の伝統を、その短大で見たのです。日本では、「うちは短大ですから大した歴史はありません」などと言うところですが、全然違います。私にとって、単なる学会見学以上の成果がそのときにありました。

私は帰国して、それからずっと大学にアーカイブズをつくることに力を注ぐことになったわけです。現在でも、いろいろな所から大学問題について話をしてほしいとおっしゃってくださるのですが、私は特にアーカイブズをつくりたい、沿革史をつくりたいという大学からお話があると、断らないことにしております。それは私の使命であると思っているのです。私が本当に力を入れて話ができるのは、その二つのテーマなのです。

その後、今いろいろな国公私立大学でアーカイブズが広がっています。私学では、いくつかの大学で例外的に、非常に力を入れてアーカイブズを育てられている所もあります。この近くでは同志社ですね。それから国立大学では断然京都大学。もっと西へ行くと九州大学。広島大学も最近頑張っておられます。いろんな大学が、うんと力を入れられるようになりました。北の方では、東北大学や北海道大学がそうです。旧帝大を中心とする国立大学は今、競って大学アーカイブズの設立に力を注いでおられます。中には、予算がなくなったから、運営交付金が減ったから、ということで縮小しておられる所もあって、一様

というわけにはいきませんけれども、全体としては昔とは比較にならないくらい、アーカイブズは広まってきております。新制国立大学もそうです。静岡大学、金沢大学などでは、それぞれ力を入れて自分の大学の沿革を編纂され、資料を集めていらっしゃいます。もう一つ、大阪市立大学も頑張って史料室をつくっておられます。こういった所は、どこも苦しいながら頑張っていらっしゃるんですね。

次に、何を集めるのかということになります。国立大学の場合、非現用文書、今使っていない文書を、所持している所が選別し、アーカイブズに送ります。アーカイブズはさらにそれを選別して保存します。さらにそれでもスペースが足らない場合は、どんどんフィルム化し、映像化して、そのフィルムを保管するということになっていきます。先ほど上映された記録映画のように、これからどんどん映像も増えていくでしょう。例えば「近畿大学のあゆみ」とか、「近畿大学を目指そう」などの PR フィルムは毎年つくられますね。このようなものも５年ごとに１つずつは保存するようなシステムにすればいいのです。

アメリカでもう一つ、スタンフォード大学を見ました。名門大学であるはずの同大学のアーカイブズは、むしろ貧弱で、それに驚いたのですが、それでもスタンフォード大学のアーカイブズは物品を一から保存しています。例えば大学が開かれたときの門標をちゃんと保存していました。その頃のアメリカの証書、大学として認定するという、認証機関から来た証書などもちゃんと保存している。応援旗といったものもきちんとある。物を中心にかなり充実して集めていらっしゃるのがスタンフォードでした。このように各大学、アーカイブズには特徴があります。近畿大学のアーカイブズも特徴をお持ちになって結構だと思うんですね。そういう特徴に基づいて大学アーカイブズをつくっていくことがアメリカでは進められてきましたし、日本でもやがてそういうふうになっていくでしょう。

３．アーカイブズ設置はどのような役に立つか

三番目として、アーカイブズの設置はどのような役に立つのか。

一番大きいのは、今求められている建学の理念とは何かということを解明するのに、なくてはならないのです。このことに一番熱心なのが、例えば慶應義塾です。福沢研究と慶應義塾アーカイブズは切り離せません。福沢諭吉研究センターと慶應義塾アーカイブズという不可分の関係なのです。同じく大阪市立大学では、恒藤恭という敗戦直後の学長と大学との関係が中心になっています。こういう大学はいっぱいあります。そういったことを通じて何を明らかにしたいかというと、建学の理念なのです。

ところがこれは、なかなか実は困難な、一筋縄では行かないテーマです。

事務局の方はよくご存じかと思いますけれども、例えば文科省宛てにGPの申請書などを書かされるとき、絶対に言われることは何かというと、「この改革のテーマはおたくの建学の精神とどうつながっていますか」。あるいは、「これを生み出した沿革は何ですか」と聞かれるわけです。つまり、Aという改革テーマをお立てになっているのは結構なんだけど、これはおたくの建学の精神とどうつながっているかということです。最近は文科省や審議会がそういうことを聞くようになっているのです。そうすると、否応なしに沿革をはっきりさせる必要があります。どの大学でも、それは必死で明らかにしようとしておられます。福沢諭吉などは非常に楽ですね。私の今いる立教大学のようなミッションスクールも非常に楽です。はっきりしていますから。それ以外の大学では苦しんでいる場合もあるのですが、そういうときに私は申し上げているのです。そこをつくった方たちの言葉の中だけで建学の精神を探り出そうとしないほうがいいと。

そういう方法でやっていると、東大のような所には建学の精神はありません。私は百年史に携わったからよく分かります。では何があるかというと、国家の理念があるんですね。明治国家の理念が、東大建設の理念だったのです。その程度のことで始まって、だんだんその後にいろんなことが付け加わってきて、今日の東大なり京大があるということになります。そういう場合、どうやって建学の精神を確かめるのか。創設者の言葉からは何も出てこない。何から出てくるかというと、それ以後百年の選択の歴史が建学の理念なのです。宙に浮いたような理念があって、その実現のためにこの学校があるというのではなくて、開設以降どういう選択をその大学がしてきたか、その中に実は建学の理念がもっとも鮮やかに出るんです。

立教の場合は、ミッションスクールで簡単だと言いましたけれども、実はウイリアムズという日本聖公会の主教に後になった人が始めたのですが、この方は残念ながら１冊も本を書いておらず、書簡が残っているだけで、全く手がかりがありませんでした。彼の墓標に書いてあるのは、「道を伝えて己を伝えず」という言葉です。一切自分の功績は残さないということで亡くなった方なのです。こういう方の場合、建学の精神を言葉にすることはできないんですね。ということは、それ以後大学昇格、戦争、戦後の復興等々に際して、立教大学はどのような選択をしたか、これを確かめていくほかないんですね。その行きつく果てのところに、遡っていった果てのところに、実はある建学の精神があったのではないかと考えられます。今あわてて判断する必要はない。大学の百年間の選択の歴史を明ら

かにすることが先決です。それを一番正確に表すのは何かというと、アーカイブズなのです。アーカイブズがなかったら、正確に分かりません。アーカイブズは、建学の精神をそれ自体として表す、極めて重要な施設になっているのです。

次に、大学のアイデンティティをここで共有できることです。特に展示施設を併せて設置されると、これは非常に大きい影響を与えます。例えば校友、父母、来賓、オープンキャンパスに来た高校生、付属校や系列校の生徒とその父母に対して大学を紹介する一番いいチャンスなんですね。そこに来て見ていただければ、大学の特色が分かるということになります。展示施設として全国一の規模を誇っているのは京都大学です。よほど当時の総長の判断がよかったんだと思います。記念館の 1 階はほとんどアーカイブズ施設にあてられ、その中に広々とした展示施設を設け、その一部は時々のポイントになる特別な企画展ができるようになっています。あれは全国に冠たるものですね。

展示施設は私立大学にもいくつもあります。先ほど申し上げた大東文化大学にもあります。私が理事会でそのことを提案しましたときに、一番喜んだのは校友会代表の理事たちでした。「そういう施設が一つあると、我々が校友会の大会を開いたときにみんなが見ることができる。ぜひつくってください」と。あっという間に部屋をつくることができました。部屋は小さいのですが、それでも皆見に来るんですよ。例えば同大学は書道が昔から有名でした。あと成績がよかったのは箱根駅伝ですね。それらの成果をテーマに展示して行くと、大学としてのアイデンティティを関係者皆で共有する場所になっていくのです。その点で、展示は、非常に効用の高い施設であります。しかし、アーカイブズがないと展示はできません。そういった点では、展示館は、アーカイブズを延長していった先の、効果ある施設です。

三番目は、自校教育をなさるときに、アーカイブズが絶対に必要です。

私は今から 10 年前に立教大学で、自分の授業で「立教生に立教を語る」ことを、2 時間 2 週間にわたって行いました。やってみてすごく効果があることが分かりました。

全学から集まった教養科目受講の学生、1 年から 4 年まで 55 人のうち、1 年が半数以上の 30 名でした。講義してみて、びっくりしました。学生は立教を知って入ってきたのではないということがはっきりしたのです。どこに行きたかったのか聞いてみると、みんな口を揃えて、男性は半分ほどが早稲田に行きたかったと。女性はだいたい立教に行きたかったということでしたが、上智や青学はどうかと聞くと、それでもよかったということでした。誰も立教に必然性を持って入ってきていない、ということが、やってみてよく分かり

ました。JARパックといって、上智、青山、立教の３校を指すのですが、そのうちで一番発表が早かったのでここにしたと、その程度だったのです。お互いの出会いはまことにあやふやなもので、学生は偶然そこに座っていて、そこへ偶然私が現れたと。これはいけないと思いまして、「次週から立教についての講義をする」と言いました。学生は不審そうでしたが、2週間、徹底的に話しました。歴史をベースにおいて全部やって、分かったのです。彼らは実はこのテーマを聞いて一番安心したのです。居場所が分かったということですね。自分がいるこの場所はどういう場所なのかということを、彼らは初めて知ったのです。

それまで知っていたのは何かというと、一般入試で来た子は、河合塾などの出している難易度比較です。あとは学内の環境がいいかどうか、交通の便がいいかどうか。そのくらいで、大学の特色にひかれて来たわけではない。建学の精神に感動したなんて、ほとんどいないということが、やってみて分かりました。もちろん相手は無責任に来ているわけではなくて、一応選択して来ているわけですが、それでいて、そのような状態なのです。

ですから、いかに日本の大学に不本意な入学者が多いか。しかも全国にわたって見てみると、実は不本意入学者で溢れかえっているのが日本の大学なんだということが分かります。それに対してきちっと、今君たちが座っている大学はどのようにつくられ、百年間の間にこういういいこともしたしこういう悪いこともしたと言う。これからはこういうふうにこの大学をつくりたいと。「私はなぜ君たちの前でこうしてしゃべっているか、どうして立教大学の教授をやっているのか」。こういう話をしますと、彼らは安心するんです。まさに「居場所が分かった」という安心感。これは彼らにとって非常に大きい活性化の要素になります。

その当時はリアクションペーパーなんてありませんから、出席表の裏に学生たちはびっしりと感想を書いていました。その反応を見て驚きました。例えば国際法学科の２年生女子は、「この講義を取って初めて青山学院、明治学院、そして立教大学の三つがどんなに違うのか非常によく分かった」と。こちらからすると常識的なことで、立教は聖公会の設立です。青山学院はメソジスト、明治学院もメソジスト、それから上智大学はイエズス会というふうに、全く違う教派でできているということは、私たちは知っていますけど、学生たちはミッションスクールだというくらいしか知らない。それが、講義を聞いていくと分かってくるのです。「私はクラスに帰って皆に自慢したいと思います。今日やっとそういう次第が分かりました」と書いてくれる女の子がいました。また別の子は、「私は就職が内定して、ある企業に就職することになっています。でも実はこれまで４年間、この大学が嫌

いで嫌いでたまりませんでした。仕方なく出ていました。しかし今日の先生の話を聞いていて、この大学がすごく好きになりました。卒業間際にこんな経験を与えてくださって、本当にありがとうございました」と、びっしり書いてくれたのです。それまで40年近く教員をやっていましたが、こんな反応を受けたのは初めてでした。これは、講義が彼らの胸に届いたんだろうと思うんですね。そういうふうにすると、いわば自分が学生とアイデンティティを共有したことになるのです。これは大きいことだと思います。文科省の申請書に書けるというような効用ではありません。もっと深い、アイデンティティの共有です。

加えて、実は自校教育をまじめにやると、教員と学生との間だけでなく、教員と職員との間のアイデンティティの共有も生まれてきます。どういうことかというと、職員の方たちの協力なしには、自校教育はできないからです。こちらの自校教育も、恐らく職員の方たちの協力なしには実現なされなかっただろうと思います。自校教育を本気でやることを通じて、職員と教員の間の協同が実現するのです。これは大きい効果だと思います。

ある先生の調査によると、2008年に134の大学で自校教育が実現しているそうです。今は2011年ですから、恐らく200近い大学でなさっているのではないでしょうか。広がっていく状況を見ると、大学の名声や伝統、レベルの如何には関係ありません。

やる方としては面白いですよ。いいことばかりしゃべっても学生は信用しません。ああ、またPRかと思うんでしょうね。そうではなくて、恥も晒す必要があるのです。英語で言うところのdiscloseを学生たちも求めているのです。立教の場合、1973年に一大セクハラ事件が起こりました。事件の全貌、その後、事件が解明された経緯、その後大学がどのような対応を取ったか、これを詳しくしゃべりますと、学生たちは本当に真剣に聞きます。聞いた後、そんなことを起こした大学なんて私は辞めます、と言う学生がいるかと思いきや、全くゼロでした。そして安堵します。そういう所に私はいるんだ、それでもこの大学ではそういう問題に立ち向かった先生や職員方がおられたんだと。つまり大学全体を支える願い、それが分かるんですね。その願いのことを今世間では「大学の理念」と言っているのです。学生たちは、大学の裏も表も包み隠さない話を聞くことで、実は大学の理念が分かるのです。隠してはいけ

ません。

ある九州の先生が、私の自校教育の話を聞いた後で、寄って来られました。その先生がおっしゃるには、「私のいる大学は 20 年前に建設業者がつくった大学なんです。立教大学なら 100 年伝統がおありだから 1 年間でも授業できるでしょうが、私の大学でやろうと思ったら 1 時間ももちません。どうしたらいいですか」と。私は言いました。「先生、そのことをおっしゃったらいい」と。「大学がつくられた経過をきちっと学生には言うべきです。一番大事なことは、先生がなぜその大学で教えていらっしゃるか、そのことを学生に正確に伝えることです。そして 20 年の間に学生がどう変わってきたか、自分はどういうことが嬉しかったか、こういうことを伝えれば、学生は必ず聞いてくれます」と言ったんです。そのとき私の頭にあったのは、アメリカの名門大学のことでした。東のハーバード、西のスタンフォードなどと今は言われていますけれども、そのスタンフォードに行ってみると、大学の始まりは鉄道会社のスタンフォード・ファミリーが大儲けをした金でつくった大学だったのです。ハーバードは、ジョン・ハーバードという無名の青年に突然遺産が転がり込んできて、他にしょうがないから自分の名前を冠した小さいカレッジをつくったのが、興りです。こうして大学の来歴を洗いますと、どんな大学でも人にあまり話したくないエピソードや歴史がはいっぱいあります。でも、勇気を持ってそれを学生に話すと、学生はそのことを「よくぞ話してもらった」と感じるのです。また、自分たちは信じられたのだ、という気持ちにもなります。これは間違いのない自校教育の “成果” だと思います。

結び

最後に、結びとして申し上げます。

大規模大学にとってアーカイブズの設置は緊急に必要です。ただし、こちらのように、たくさんのキャンパスがあり、たくさんの学部がある大学がアーカイブズをお創りになるのは非常に大変だと思います。これはただ、アーカイブズをつくるときに第一歩の、どこでもぶつかる経験です。

私が行きましたアメリカのアーキビストの大会でも、こういうワークショップがありました。大規模大学においてアーカイブズをつくるときの経験について、30 人くらいの人が聴講して、MIT（マサチューセッツ工科大学）でアーカイブズをつくった経験がある女性から講義を受けました。アーカイブズ（文書）を寄付してもらうための心がけ、寄付された文書を読むときのアーキビストの心がけ等、立派な問答形式の授業でやってくれました。

私もクラスの一員に入って、とても面白かった。これからいろんな国内外の大学の経験をお聞きになるといいと思います。大規模大学にとってこそ、アーカイブズを設置することは緊急の課題です。

二番目に、「大学」が大学になるということ。これが今、求められています。先にもふれましたように、新しい認証評価の中に、大学の内部質保証システムの重要な一部として、二つのことが新しく書かれています。一つは大学沿革史の編纂刊行をきちんとやっているかということ、もう一つの尺度は、大学文書の保存活用をやっているかということです。この二つが尺度として明記されているのです。私どもも周りにずいぶん勧めました。アーカイブズがなかったら大学ではないと世界的にも言われていますよと。

こういうことにはきちっと取り組むべきです。内部質保証システムの一つとして、アーカイブズがきちんと位置づけられつつあるということをもう一度繰り返し、御静聴への御礼を申し上げて、話を終わりにしたいと思います。

（拍手）

増田　寺﨑先生、どうもありがとうございました。先生はこの後退席されますので、どうしてもお聞きしておきたいという先生や職員の方がおられましたらどうぞ。

仁藤先生（仁藤伸昌）どうぞ。

仁藤　生物理工学部で、バックグラウンドは農学なんですけど、今日のお話にたいへん感動いたしまして、今でもちょっと震えている思いです。途中の先生のお話で、ライブラリー、アーカイブズ、それからミュージアムということがございました。私どもの大学では、私の所もそうなのですが、理系では文書以外にいろいろ現物というものがかなりありまして、そういったものも一つのアーカイブズだと思うんですけれども、また逆に言えば、科学史的なミュージアムでも分かるような気がします。そのミュージアム的な性格と、アーカイブズとの境界というか、展示というお言葉もありましたけれども、その境界を、私どもがこれからアーカイブズやミュージアムをつくっていく上でどのようなスタンスを持って進めるべきなのか、教えていただければと思います。

寺﨑　それはすごく微妙です。現実的にはあまり境界はないと言ってもいいくらいです。というのは、いろんな国のアーカイブズのことを聞きますと、アーカイブズに何を集める

かということで、物品を挙げる所も多いんですよ。物品といっても大小がありまして、例えば京都大学の持っていらっしゃる物品の中で珍しいものに、京都帝国大学の印があります。それが第一番目に飾ってあるのですが、「これはどうしたんですか」と聞くと、「いや、実は捨てられようとしていました」と。旧京都帝国大学の公印ですから、かなりの大きさです。捨てられようとしていたのを誰かが見つけて、「これは昔の印鑑じゃないか」と。そして開いてみると、確かに京都帝大の代表印鑑だったのです。大切な所蔵品になっています。

印鑑くらいの大きさならいいのですが、旗とか看板などは大きいのでスペースの都合もあります。私は基本的に、それくらい大きくなるとミュージアムに置くべきだと思います。東京大学だと総合資料館、今は名前が変わって博物館のものになりますね。「境界」はありませんが、分担して保存するのは大切だと思います。

仁藤　ありがとうございました。一部だけ強調するようで失礼かもしれませんが、私どもの大学には医学部がありまして、そこに行きますと、先生もご存じと思いますが和歌山県に、日本で麻酔薬を最初に始めた華岡青洲という方がおりまして、その方が日本で初めて外科手術をしたという文献があります。かなり歴史的な意味合いのあるものだと思いますし、大学としてぜひ活用したいと個人的に思っているのですが、たいへん不躾な質問でしたがありがとうございました。

寺﨑　どちらかで方針をお決めになるとよろしいと思いますね。

増田　もう一人くらい、どなたかおられましたら。

それでは質問もないようですので、これで寺﨑先生のご講演を終わらせていただきたいと思います。もう一度盛大な拍手をお願いいたします。先生、どうもありがとうございました。

（拍手）

―― 休　憩 ――

増田　それではただ今から第２部を始めさせていただきたいと思います。第２部は私立大学のアーカイブズ活用事例ということで、学習院大学の桑尾光太郎先生にお話をいただき

ます。学習院は本年からアーカイブズを始められまして、現在様々な資料を整理されている段階でございますけれども、我々が大学でアーカイブズを始めるにあたって非常に参考になる示唆をいただけるのではないかと思っております。それでは、講師の桑尾光太郎先生をご紹介いたします。学習院大学大学院修了後、学習院大学史料館助手として学習院大学 50 年史の編纂を担当されておられます。その後東京経済大学百年史編纂、学習院女子中・高等科 125 年史編纂に従事され、関係資料の調査や整理、年史の執筆編集に携わられ、学習院大学や東京経済大学で自校史授業を担当されておられます。現職は学習院アーカイブズ職員という形ですけれども、ご専攻は日本近現代史、大学史でございます。

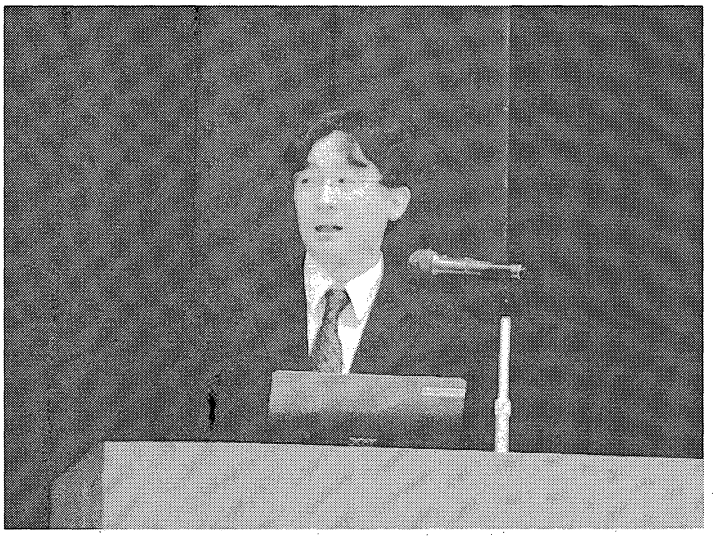
それでは桑尾先生、どうぞよろしくお願いいたします。

パート２　「学習院アーカイブズの活動と課題
―私大アーカイブズの一事例―」

１．学習院アーカイブズの概要

ご紹介にあずかりました桑尾光太郎と申します。お配りしたレジュメにそってお話を進めたいと思います。

まず、私立大学のアーカイブズのあり方に、とくに決まったものはありません。その大学のそれぞれの個性を活かしながらつくっていくということで、現在私立大学でアーカイブズ的なものを置いている大学は多くありますけれども、そのあり方は様々です。アーカイブズをいかに考えて、いかに動かしていくかということについては、その大学の主体性が一番大切になります。つまり近畿大学なら近畿大学ならではのアーカイブズを展開していただきたいと存じます。



桑尾光太郎氏

私は寺﨑先生とは違って一介の事務職員に過ぎませんし、学習院アーカイブズはこの４月に発足したばかりで、大した仕事は何もし

ておりません。問題点ばかりなのですが、現状を簡単にご紹介して、反面教師としてご参考にしていただければ幸いです。今日は所蔵資料の画像をご紹介します。そちらのほうが面白いと思いますので、他は略して進みたいと思います。

先ほど申しましたように、学習院アーカイブズは今年４月に発足しました。といっても前身があり、総務課院史資料室を改組して、独立の事務組織としてリニューアルされたことになります。今年度のスタッフは職員２名です。レジュメにあるように、目的は「学習院アーカイブズは、本院の経営、教育・研究活動及びこれらの活動に伴う事務処理において作成され、収受される史資料のうち、将来に残すべき価値のある史資料を評価選別し、保存・管理する組織として設立する」とうたわれています。要はどういうことかというと、２つの役割に大別できます。まず、史資料により学習院の歴史と伝統を確認する場として、研究教育・広報などの諸活動に寄与するということで、寺崎先生からお話がありましたような自校史教育のように、いろいろな活動―例えば展示ですとか年史編纂など―が、多くの私立大学で実践されています。先ほど見学させていただきましたが、近畿大学にも世耕弘一記念室があり、私どもも参考にさせていただきたいと存じます。以上はアーカイブズとしてイメージしやすい仕事だと思いますが、それに加えてもう一つ考えておりますのは、文書の整理と管理を進め、事務効率の向上など業務改善に寄与するという役割です。これは教職員の方々にとってより身近な、日頃作っている学内の文書をどのように管理するかということです。つまり日常の文書管理を通して、まずどこに何があるかを明確にし、重要な文書は確実に将来に伝えていく体系づくりをめざすということになります。重要な文書はいうまでもなく、将来は学校の歴史を示す資料となるわけですから、ふたつめの役割はひとつめの役割を支える仕事となります。

日常の業務で作成される文書の管理については、近年国立大学が、情報公開や公文書管理法との関係で実践に踏み込んでいます。文書の適切な管理は私立大学でもやらなければならないところですが、私学は国立と違って法律上の義務がないため、なかなか進展していないと思います。学習院の文書管理のあり方もプリミティブな状態で、どこに何があるのかよく分からない、引継ぎがうまくいかない、あると思っていたものが捨てられていた、あったとしてもどこにあるのか分からないという事態が発生しております。しかし、私学や企業のような民間団体でも、文書管理の合理化は経営に資するものだという認識が、次第に深まりつつあるように感じます。近畿大学の状況はいかがでしょうか。

アーカイブズのステップとしては、最初は極めてシンプルに、「どこに何があるか」とい

うことを調査し確認することです。それから 2 番目のステップとして、アーカイブズとして保存することに対して必要な設備、保存環境、スタッフを準備します。3 番目は、実際に残すものをアーカイブズに移すという、物理的にも極めて大きな作業です。それから 4 番目が、所蔵文書・資料の活用ということですからアウトプットになると思います。、1 番目から 3 番目は、言葉で言うのは簡単ですけど、実際にはなかなか骨の折れるインプットの作業です。私の今日の報告の趣旨は、このインプットというもの、日頃表立っては見えない仕事が、実は学校経営にとってとても重要なのだということです。これを言ってしまえば終わりなのですが、これから具体的な話に入ります。

２．学習院の沿革と年史編纂・資料保存

では学習院の歴史と、資料保存がどのように行われてきたかということを、簡単にお話しします。学習院のルーツは、幕末の京都で 1847 年に開設された公家の教育機関にあります。明治維新を経て 1877 年、東京大学と同じ年に、改めて学習院として開校しました。戦前までの学習院は華族の教育を主眼としたため、1884 年に文部省ではなく宮内省の管轄となる官立学校、今でいう国立学校となりました。大きな変化があったのは戦後の 1947 年のことで、宮内省を離れて財団法人化し、私立学校となって現在に至ります。華族の教育というのが建学の精神と言えるかどうか分からないのですが、それを捨てて普通の学校としてリニューアルされたことになります。つまり、国立の学校が民営化されて学校の性格も大きく変わったという、日本の学校では極めて珍しい歴史を持っているわけです。

寺﨑先生のお話にもありましたように、1970 年代に明治初期に開設された大学が創立百周年を迎えて、東大、早稲田、明治、同志社、北大、立教といった学校が次々と百年史編纂を行いました。学習院も、『学習院百年史』の編纂を行いました。今紹介した大学は、いずれも収集資料をもとにアーカイブズあるいはそれに準じる機関を設置していたのですが、学習院はその点で大きく立ち遅れていたと言わざるを得ません。とはいえ忘れてならないのは、百年史編纂を行うことによって所蔵資料の目録づくりと、新たな資料の収集・整理作業が根気強く行われたことです。そして年表、資料目録、教員の経歴がカード化されました。こうしたカードは、現在も検索やレファレンス対応の基本ツールとして活用され、所蔵資料データベースの土台となっています。過去にやったことの継続というのは、つくづく大切だと思っております。

百年史編纂事業が終わった後、その資料置き場は院史資料室という形で担当職員一人を

置いて細々と存在していました。ただ置かれていたという状態が続いていましたが、1990年代に今度は大学 50 年史の編纂が開始されます。ちなみに学習院大学は近畿大学と同じ1949年に、新制大学として開設されました。そのときに専ら資料収集などの仕事を担当したのが私で、同じ時期に京都大学百年史編纂を担当されていたのが冨岡先生です。大学 50年史の時期には、戦後の事務文書の調査・移管・目録作成など、将来のアーカイブズを視野に入れた作業が行われました。大層なことは考えてはいなかったんですけど、新制大学の歴史、つまり 1949 年から 1999 年までの歴史を叙述するには、当然近年の文書、例えば1990 年代のカリキュラム改革の文書なども見直さなくてはなりません。そこで私は各事務部署の倉庫をくまなく探しました。それから職員と話し合い、こんな資料はないかといった相談をしておりました。そういうことをやって各部署と付き合っていると、使わなくなった文書－非現用文書－が集まってきます。これは移管のルールがあるとかではなく、職員と私との間で「大事そうだから取っておいてよ、ウチにあったら捨てられちゃうから」とか、「ウチではもういらないから」というような感覚で移管をしていました。こうして事務文書が徐々に集まってきたのです。

しかしこの後には長い道のりがありまして、大学 50 年史が終了すると集めた資料をいかに活用するかという議論は行われたのですが、結局は予算や人件費などに対する判断もあったと思いますけど、アーカイブズは実現しませんでした。その状況が変わったのが、2008年の大学院アーカイブズ学専攻の開設からです。日本で初のアーカイブズ学研究を行う大学院があるのに、自分が持っている資料に何があるかがよくわからないでは格好悪い、ということかどうかは分かりませんが、ようやくお粗末な現状に目を向け始めるようになりました。翌 2009 年に学習院アーカイブズ準備室が編成され、2011 年に正式に発足した次第です。

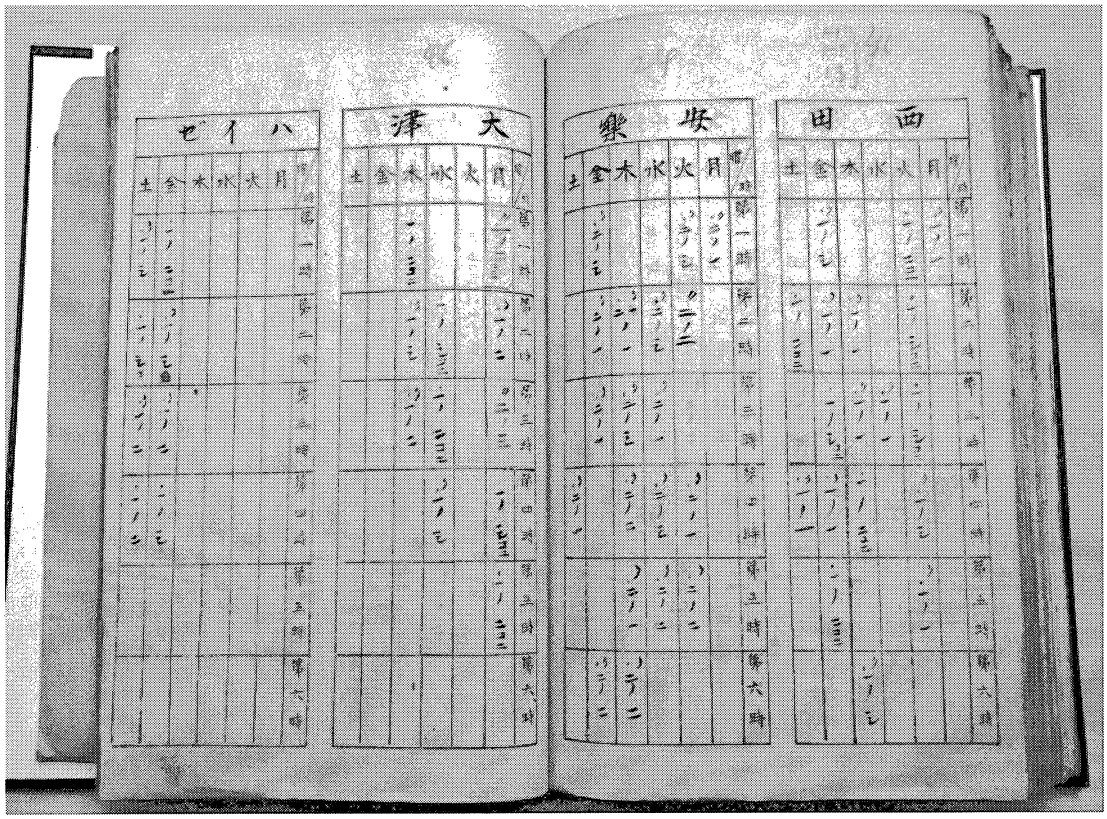
こうして見ると、学習院での資料の収集や整理は、いずれも年史編纂を機会に進められました。これがアーカイブズの土台となっています。2011 年 1 月にも、学習院女子中等科・高等科の 125 年史が刊行されました。私はその編纂に関わっていたのですが、関連資料の調査・整理が大幅に進展し、掘り出し物が出たりしています。アーカイブズの存在に対する教職員の理解も、まだまだですけどある程度は深まってきたと思います。

３．所蔵資料の概要

では、学習院アーカイブズはどのような資料を持っているかということを紹介していき

ます。私が根城にしているのは非常に粗末な部屋で、本部棟の地下を改装して収蔵庫兼事務室・閲覧室として使用しています。資料室というと、企業等では一般に「窓際」という印象が強いと思いますけど、窓さえありません。これから各部署の事務文書を移管していくには、とてもこのようなスペースでは対応できません。段ボール箱にして1100箱くらいの文書や資料が入っていて、現在すでに満杯の状態です。ですから、収蔵室や閲覧スペースなどの要求を重ねて行っていますが―どの大学も同様だと思いますけど―人件費とスペースは一番苦慮するところなんですね。大学のキャンパスプランの中でいろいろ議論はされているのですが、どうしても教育研究のスペースが優先されるため、資料の収蔵スペースや図書館の書庫といったバックヤードのスペースの確保は、なかなか難しいと思っています。

具体的な資料を挙げますと、まず戦前の宮内省時代の文書資料があります。画像は教務録という教務関係の文書で、戦前分はきれいに整理されています。それから例えば運動会ですとか卒業式、入学式といったイベントがあったときの記録が、明治時代から昭和の戦前までまとめられています。教務関係にどんなものが入っているかといいますと、例えば明治43年の時間割があります。中に「西田」とあるのは、哲学者の西田幾多郎です。これ



時間表西田

を見ると週 15 コマの授業をやっていて、結構働いていたことが分かるんですけど、西田がどの学年のどんな授業を何コマ教えていたかが明記されています。むしろ戦後の時間割の方が残されていません。次の文書は明治 20 年とあり、昭憲皇太后が華族女学校に授業参観に来たときの記録です。第 3 級生の英語教師は津田梅子と記されていて、津田梅子の英語の授業を参観したことがわかります。次は、大正元年 9 月 13 日の庶務日誌ですが、この日に明治天皇の大喪がありました。その夜、当時学習院長を務めていた乃木希典が「閣下の御邸にてご夫妻自刃」とあり、有名な殉死の事件が記されています。これはかなり生々しい資料です。

戦後の資料では、近畿大学にも保存されていると思いますが、たとえば雑件録があります。昭和 20 年代から 40 年代にかけての文書は、ほとんどわら半紙で作成されており、酸性劣化がどの学校でも他機関でも大きな問題になっています。戦前の文書とは比べものにならないくらい劣化しており、こうしたものが大量にあります。画像は、昭和 22 年に学習院が私立学校になった時の重要な文書ですが、触るとボロボロと崩れる状態です。もう一つの例として、先ほど学習院というのは国立学校が民営化された珍しい歴史を持っているとお話ししましたけど、当時の学習院長が GHQ と存続交渉を行った記録があります。山梨勝之進という海軍大将が院長をやっていたのですが、GHQ に対する申請書を、こういうふうに直してみてはどうかという添削を加えた資料です。こういう大切な資料は、デジタル化をはじめ酸を抜く、補強するといった修復も少しずつ行っているのですが、非常にコストがかかります。ですから本当に少しの措置しかできないというのが悩みの種です。それから、各部署から移管される文書に、建物の図面などがあります。既に取り壊して現存しない建物の図面も移管されてきますので、これらも大切な資料となります。

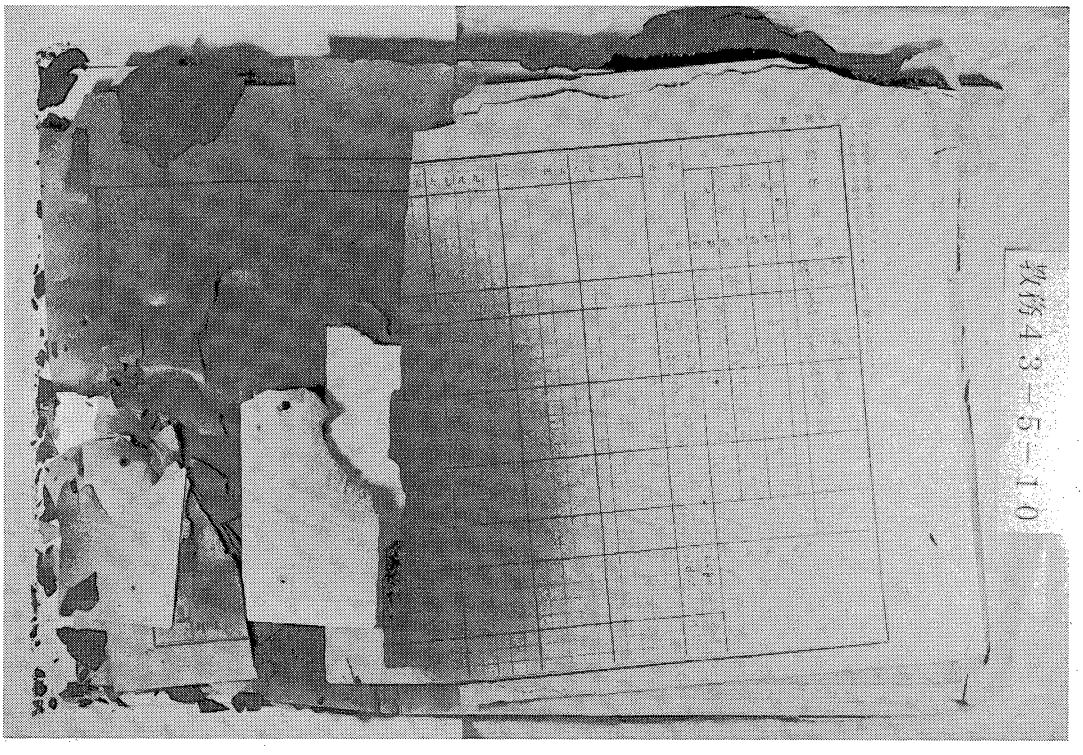
こうして事務文書などを整理していくと、ファイルの中に珍品が紛れ込んでいる場合があります。画像の大学案内ポスター（1957 年）はその一つです。こんなものを誰も保存しようとは思わないでしょうから、偶然残っていたことになります。当時の学習院は、戦前の上流階級のイメージが強すぎて志願者を集めるのに苦労していました。つまり、受験の対象として意識しない人が多かったのです。そこで、「学習院は誰でも入学できます。身分などの条件はありません」と。それから、これが泣かせるのですが、「学習院はそう費用のかかる大学ではありません」と書かれています。これを見せると学生や職員の皆さんがけっこう喜ぶので、面白い資料かと思うんですけど、こうした何気ない記録が学校の歴史を如実に伝えるということを、今回強調しておきたいと思います。

大学ポスター

それから、昭和 20 年の女子学習院の生徒が疎開していたときの日誌があります。画像は 8 月 15 日の記録で注目すべきことは、中学 1 年くらいの女の子が書いているのですが、大変すぐれた文章力を持っています。さらに「午前、外国語」とあり、8 月 15 日まで女子学習院ではフランス語と英語を教えていたことがわかります。

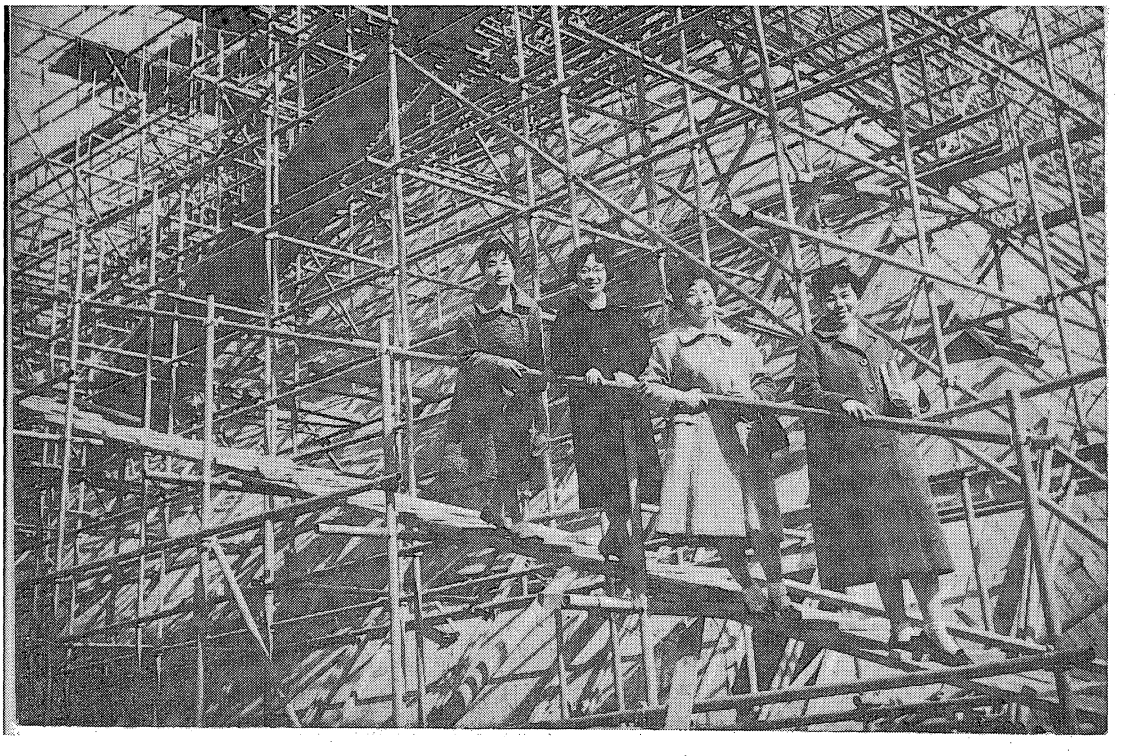
外部から寄贈される文書、卒業生から寄贈される記事もあります。画像は、翌 8 月 16 日付の「平岡公威」ですから、戦後恐らく初めての三島由紀夫の文章ではないかと思われます。「軍人の真の使命は今始まります」と書かれていて、戦後の三島の活動の出発点を示す非常に貴重な資料です。こうした資料も寄贈されています。

写真は、たいへん利用頻度の高い資料です。「貸してほしい、展示で使いたい」といった要望が博物館や出版社などからあり、広報などにも使います。こうした写真をデータベース化して、検索できるようにしてあります。画像は昭和 10 年の女子学習院です。学校のあった場所は現在秩父宮ラグビー場になっており、上方に神宮球場が写っています。女子学習院の木造校舎は、昭和 20 年 5 月 25 日の空襲で全焼しました。画像は焼け跡を片付けてラグビー場を造成している光景で、神宮球場スタンドから撮影されたものです。この写真はラグビー場を造営した鹿島建設の広報室が所蔵していて、そこからお借りしました。なぜ焼け跡の写真をお見せしたかというと、つい 1 ヶ月ほど前に学習院女子中・高等科の倉庫の中から、焼け焦げた戦前の成績原簿が発見されたからです。成績簿は学校にとって最も大切な資料ですけど、取り出したときには焦げ臭い匂いがしました。この成績簿をみると、戦時下の非常事態の中で先生たちは大変丁寧に成績をつけています。また、空襲後に焼け跡の中から堀り出すというようなこともやっているわけです。私はあまり感激するほうではないのですが、さすがにこの資料を見つけたときにはたいへん感銘を受けました。学校の歴史や伝統というものは、建学の精神云々というよりも、こうした資料を見せる方が、何か伝わってくるような気がします。



女子部焼焦文書

印刷刊行物も重要なアーカイブズの資料です。たとえば大学案内は、大学の歴史を語る資料として何十年の後に威力を発揮します。画像は1965年の大学案内で、表紙に写っている変わった形の校舎はピラミッド校舎と呼ばれ、学習院のシンボル的な存在として1960年に建設されました。2008年に老朽化のため取り壊され、それを惜しむ教職員や卒業生も多かったんですけど、最近次のような写真が卒業生から寄贈されました。ピラミッド校舎が建設中だった1960年の冬だと思うんですけど、女子学生が工事現場に入り込んで撮ったものです。卒業生、元教職員、それから関係者の遺族の方というのは、学校に対してある思い入れを強く持っています。その思い入れに対して適切に誠意を持って対応するのもアーカイブズの役割ですし、そうしたことに真面目に対応していると、先ほどの三島由紀夫の葉書のような貴重な資料なども集まってくることになります。



建築中のピラミッド校舎

次は学習院初等科生徒の文集『こざくら』です。今でも発行されている長い伝統のある文集で、画像は昭和12年の末に発行されたものです。この年に日中戦争がはじまり、誌面は戦争賛美の生徒の作文でいっぱいです。当時の小学5、6年生が、のちの学徒出陣する世代に当たるわけで、この軍国主義教育の恐ろしさというものを如実に伝える資料です。学習院という学校は軍国主義教育をやっていなかった、リベラルだったなどと言う人もいま

すが、それは違うだろうと私は思っています。

モノ資料もアーカイブズに移管もしくは寄贈されます。ちなみにモノ資料については、学習院にも博物館に相当する資料保存機関がありますが、どこが所蔵するかはケースバイケースです。この資料はどこに置いてあるのがその資料にとって一番幸せなのかということを考えながら、部署間で相談して決めています。画像の碁盤は、皇室のお子さまが５歳の時に碁盤に乗って飛び降りる儀式の際に使われる碁盤の姉妹版です。この碁盤が学長室に置かれていて、アーカイブズに移管される予定です。また、自動演奏ピアノという珍品もあります。元々貞明皇后の所蔵品で、今の天皇陛下が学習院の学生寮におられたときに皇室から下賜されたものです。しばらく音楽室にほったらかしにされていたのですが、修復されて現在は学内のレストランに置かれています。管理はアーカイブズが担当し、時々卒業生の会に呼ばれて操作したりしています。他にもいろんなものが学内から出てきます。画像は掛地図を調査している場面ですが、女子中・高等科にはなぜか明治時代に陸軍の作成した地図が残されていました。まったく恐ろしい学校だなと思います。

以上、こうした資料は、大学院アーカイブズ学専攻の授業などで使っています。自校史教育については私も授業を担当しているのですが、学生のモチベーションが大変高いです。画像は以上です。

４．課題と感想

最大の課題は収蔵スペースの問題です。そもそも、事務文書を置くスペースが学校全体で足りません。この合理化を図らないとどうしようもない。非現用の文書はどこかに集めておいたほうが、他の部署も自分たちの倉庫スペースが空いていいだろうと単純に考えております。移管のシステムについても考えなければならないのですが、まだどうしようかと迷っている段階です。資料の利用公開の基準と方法の検討についても、学校の文書には学生・生徒の情報が入っていますので、普通の公文書と同じには考えられないと思います。それから、文書を選別、廃棄するのがアーカイブズの役割だというのですが、いざどうやって選別していくか、保存か廃棄かを決めていくのは、非常に面倒かつ難しい作業であると思っています。

他の学内資料保存機関―図書館や博物館など―にも、学習院関係の資料は所蔵されています。それらの機関との調整と連携は、最近ＭＬＡ連携と呼ばれていますが、これはやって当たり前だろうと思います。セクショナリズムを強めるようアーカイブズなら、ないほ

うがましだと思っております。

最後に、実際に仕事をやってみての私的な感想を述べたいと思います。まず、最初に申し上げたインプットとアウトプットについてですが、アーカイブズの仕事は大きく分けて、調査して収集して整理することです。整理するとは目録を作るということにもなりますけど、こういう地道なインプットの仕事が大きいわけです。それから展示や、年史の刊行、デジタル画像の提供などアウトプットの仕事があります。経営的観点からはどうしても、目に見えるアウトプットが求められますが、地道なインプットこそ経営基盤を固める仕事だということをご理解いただければと思います。とはいえ大学に限らず、どのアーカイブズも人員・スペース・予算などで恵まれた所はありません。京都大学の文書館は極めて珍しい例だと思うんですけど、限られた力でどの仕事に重点を置いてアーカイブズの活用をはかっていくかは、その大学の経営戦略の問題だと存じます。

寺﨑先生のお話にもあったように、実際にアーカイブズの仕事をしていると、教員職員を問わず系列校も含めてあらゆる人と、ご用聞きのように分かり合える関係ができます。「倉庫を見せてください」とか、「どうですか」などと話し合いながらやっていくわけです。文書の整理や保存とは、教学組織でも事務組織でも共通の問題ですから、それを広い目で見渡して、お互いの利害を調整しながら連携を探るうえで、アーカイブズは大変便利な存在だと思っています。それから、卒業生などからの問い合わせが多いという話もしましたけど、学外との連携という意味でも大きな可能性を持っています。いずれにせよ、アーカイブズがあるおかげで便利になったと評価されるようになることが目標です。

レジュメに「アーカイブズは人の心を豊かにする存在」と、気恥ずかしくなるようなことを書きましたけど、目的にかなった資料を提供できたときや、閲覧者の要望に応えられたとき、閲覧者の方は非常にうれしそうな表情をされます。そのとき、やっていてよかったなと素直に思うんですね。3 月 11 日の地震の津波で流された写真などが、保護されて一生懸命修復されているというニュースがありましたように、人は自分や家族、友人たちが生きた証や記録を拠り所にするのは間違いないと思います。また、学校や大学に対して、卒業後に愛着や思い入れを持つ人も多くいると思います。アーカイブズの担当者としては、私は少しでも利用される方がうれしくなって帰ることができるように、努力したいとは思っております。まとまらない話で恐縮ですが、以上です。ありがとうございました。

（拍手）

増田　桑尾先生、どうもありがとうございました。貴重なご体験の中から、それからまた学習院の貴重な資料を見せていただきながらお話をいただき、本当にありがとうございました。近畿大学でも大いに参考にさせていただきたいと思います。ここで本来ですと質問をお受けさせていただくところですけれども、予定しております時間が少し過ぎておりますので、総合司会にマイクをお返ししたいと思います。

もう一度、先生に盛大な拍手をお願いいたします。

（拍手）

浦崎　寺﨑先生、桑尾先生、本日はお忙しいところおいでいただき、貴重なお話を拝聴できましたことは、我々にとってたいへん光栄なことと存じております。また、増田先生が学内で研究を始められまして、最初アーカイブズという言葉を聞いたときに、NHKのことかと思ったのですが、何をするのかと思いましたら、ちょうど大学教育の内部質保証に直接関わる話で、私どもの直近の、これからの喫緊の課題になるというお話でございました。これは恐らく、増田先生の研究成果も踏まえて、各学部でこれからどう取り組んでいくのか、学部、学科、それから教員個人そして職員の皆さんの課題になっていくのではないかと考えております。このアーカイブズを利用することで、近畿大学の社会的な評価を高め、また近畿大学に来てよかったと言ってもらえるような環境をつくることができればと考えております。

本日のご講演を踏まえて、先生方にアンケートをお願いすることになっております。今後の研修の役に立てるために、先生方のご意見を頂戴できればと思います。さらに、今日のご講演で、各学部の部署でアーカイブズに残すものを、ぱっと思いつくもので結構ですので、増田先生の所に資料としてお渡ししたいと思いますので、アンケートのほうもよろしくお願いいたします。

それではこれをもちまして、本日のFD研究集会を終了とさせていただきます。

もう一度、寺﨑先生と桑尾先生に拍手をお願いいたします。どうもありがとうございました。

（拍手）

２．講演レジュメ

パート１

近畿大学講演（２０１１／１２）

大学改革における大学アーカイブズの役割

－「大学」の基礎条件の一つとして－

寺　﨑　昌　男

はじめに

表明したい御礼

アーカイブズへの私の関わり

東京大学大学史史料室・大東文化歴史資料館

財団法人大学基準協会アーカイブズ準備

Ⅰ　大学に対するニーズの強化・多面化と求められる自己革新

１　「質」を見る関係者の目の厳しさ　－　学生確保の深刻さ

２　国際的圧力　－　国際競争の中の学士課程・大学院

３　免れがたい超少子化　－　緊急の課題としての大学改革と国際化

→「質保証」の要求はブーメランのように各大学自身に返ってくる

Ⅱ　黎明期の思い出

１　東大百年史編纂の終了前後（１９７０年代後半）－アーカイブスとは「通信倉庫」か？」

２　８０年代の世界アーカイブズ調査－分かってきた欧米その他の地域の実情

３　全米アーキビスト協会（ＳＡＡ）への派遣(1986)－大学アーキビストたち

４　東大での史料室実現、そして他大学へ

５　私学の努力、国立での普及

Ⅲ　アーカイブズ設置はどのような役に立つか

１　建学の理念の確認　－　諸「申請書」書きの苦労

２　大学アイデンティティの共有　－　展示施設設置　－　校友、父母、来賓、オープンキャンパス来場者、付属校・系列校生徒・父母への大学紹介の場

３　自校教育･沿革史編纂の確かな基礎づくり

４　近現代史研究の資料の宝庫

５　新・認証評価の尺度の一つを満たす　－

－「内部質保証システム」の中に＜大学沿革史編纂刊行＞と＜大学文書の保存活用＞が特記された　－

結び

１　大規模大学にとってアーカイブズ（歴史資料館あるいは学園史資料センター等）の設置は緊急に必要

２　「大学」が大学になるために　－　特に大学資料・情報の公開は法的に求められ、文化的にも勧奨すべき事業

以　上

パート２

2011 年 12 月 17 日

学習院アーカイブズの活動と課題―私大アーカイブズの一事例―

学習院アーカイブズ　桑尾光太郎

はじめに

私立大学のアーカイブズ：各大学で目的・事業の性格はそれぞれ

１．学習院アーカイブズの概要

2011 年 4 月　総務部総務課院史資料室を改組し事務組織として発足、職員２名

※目的：「学習院アーカイブズは、本院の経営、教育・研究活動及びこれらの活動に伴う事務処理において作成され、収受される史資料のうち、将来に残すべき価値のある史資料を評価選別し、保存・管理する組織として設立する。」（「学習院アーカイブズ規程」）

Ａ．史資料により学習院の歴史と伝統を確認する場として、教育研究・広報などの諸活動に寄与する。《多くの私学で実践》

Ｂ．文書の整理と管理を進め、事務効率の向上など業務改善に寄与する。

※ＡとＢは深く結びつく（ＢによってＡの事業が成り立つ）

↓

(1)「どこに何があるか」を調査・確認する

(2)アーカイブズとして必要な施設設備・保存環境・スタッフの準備

(3)アーカイブズへの文書・資料移管・選別・整理

(4)所蔵文書・資料の活用（教育・研究・展示・広報 etc）

２．学習院の沿革と年史編纂・資料保存

1849 京都学習院開講　1877(明治 10)東京に学習院開設　1884 宮内省所管（官立学校）

1885 華族女学校開校（女子学習院）　1947 財団法人学習院（私立学校となる）

1949 学習院大学開設

1977　創立百周年　『学習院百年史』全三編刊行（1980～86 年）

※収集資料の整理（文書・写真）、カード（資料目録・教員履歴・年表事項）の作成

現在のデータベース検索やレファレンス対応の土台

1981　総務課院史資料室設置（収集資料の保存・整理：職員１名）

1994　学習院大学五十年史編纂開始　※戦後事務文書の調査・移管・目録作成

※百年史編纂・大学史編纂の時期を通して学内から非現用文書の移管＋学外から寄贈

「ウチではもういらないから」「歴史的に大切そうだから」「祖父母の遺品」etc

2002　大学五十年史終了、収集資料は院史資料室に

2008　学習院アーカイブズ設置準備委員会設置、大学院アーカイブズ学専攻開設
2009　院史資料室に学習院アーカイブズ準備室併設
2011　『学習院女子中等科 女子高等科 125 年史』刊行
※女子部資料の調査収集・整理・デジタル化、校舎改築に伴う文書移管進む

３．所蔵文書・資料の概要

段ボール換算約 1100 箱、整理・目録作成中・一部デジタル化
①戦前期官立時代の公文書（明治～昭和：教務・庶務・式事・人事ほか）
②戦後期の文書（改組関係資料、設置認可関係、教務・事務文書ほか　酸性劣化進む）
③個人資料（元教職員・卒業生等、講義ノート、学長資料、生徒作品ほか）
④写真（広報・卒業アルバム撮影、卒業生等から収集）　※利用頻度高い
⑤学習院発行の印刷刊行物（学生新聞・広報・シラバス・学園祭パンフ etc）
⑥モノ資料（バッヂ・門標・乃木院長遺品　その他）
⑦磁気メディア、文献類、その他
※整理作業によって新たな発見続く
※閲覧・レファレンスの件数多い（資料複写・撮影・貸し出し・各種問い合わせ etc）
※教育研究・広報への活用（資料を使った教育・自校史教育・展示利用・生涯学習 etc）

４．課題

１）学内文書の移管を、どのように実現していくか？

①2009 年学内各部署アンケート：
半数の部署が文書保管スペース不足を回答、文書取扱規程に即した管理を実施できず。
各文書ファイルの保存年限が設定されていない（現用・非現用の区別？）。
→学習院全体にわたる文書管理の仕組みを要検討（例：文書取扱規程の改正）
→非現用文書はアーカイブズに移管し、選別整理の上、保管・再利用
→各部署の保管スペース確保、文書管理の合理化（事務効率の向上）
②部署別所蔵文書ファイルの作成（国立大の「法人文書ファイル管理簿」に相当）
③文書を保管する収蔵庫・作業室などスペースの問題未解決、進展せず
④事務組織と教学組織との違いをどのように考えるか？

⑤学校法人学習院のキャンパス：目白（法人本部・幼稚園・中等科・高等科・大学）
戸山（女子中高等科・女子大学）　四谷（初等科）
各キャンパスの文書・資料はそれぞれ保管・アーカイブズが支援を行う。
（例：女子中・高等科における文書整理と目録作成）
※当面は明らかに非現用の文書、各部署から移管問い合わせのあった文書・資料に対応しながら移管・選別のルールを模索

２）資料の利用公開の基準と方法の検討

※学校の文書・資料の特徴と取り扱い上の注意点

①個人情報（とくに学生生徒）の保護と取扱い

②各部署から移管された文書を、どのように選別（保存・廃棄）していくか

廃棄は難しく面倒→アーキビストの視点

（まずは重複した文書、不要なバックナンバー、残すべきではない文書から）

３）他の学内資料保存機関（図書館・博物館等）**との調整と連携**

おわりに　―やってみての実感―

①「インプット」（調査・整理）と「アウトプット」（活用）のバランス

※限られた人員・予算・スペースで何を優先させるか：経営戦略にどう生かすか

②期待される効能：さまざまな連携

（事務部署間・教員と職員・各学校間・学校と法人・学校と社会）

③アーカイブズとは「人の心を豊かにする存在」

《参考文献》（近年出版されたわかりやすいもの）

朝日崇『実践アーカイブ・マネジメント　自治体・企業・学園の実務』（出版文化社 2011）

全国大学史資料協議会編『日本の大学アーカイヴズ』（京都大学学術出版会 2005）

小池聖一『近代日本文書学研究序説』（現代史料出版 2008）

松岡資明『アーカイブズが社会を変える―公文書管理法と情報革命』（平凡社新書 2011）

石川徹也・根本彰・吉見俊哉編『つながる図書館・博物館・文書館』（東京大学出版会 2011）

鈴木秀幸『大学史および大学史活動の研究』（日本経済評論社 2010）